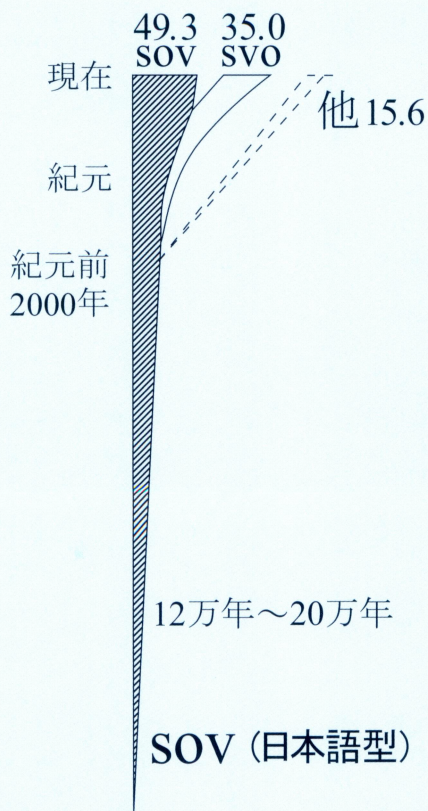


# 日本語・中国語・印欧語

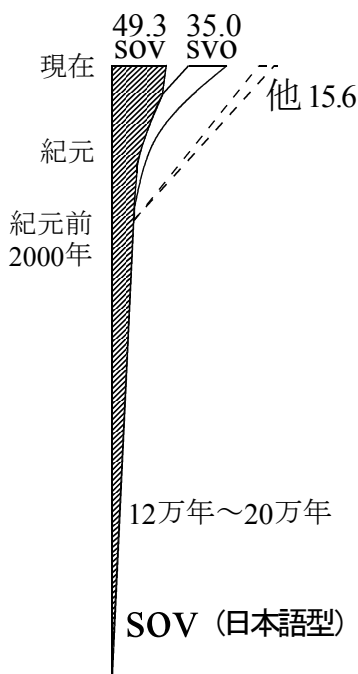
—— 日本語構造伝達文法・発展D ——



今泉	喜一	日本語 (印欧語)
関口	美緒	日本語
木村	泰介	日本語
孫	偉	中国語
蔣	家義	中国語

# 日本語・中国語・印欧語

— 日本語構造伝達文法・発展D —



今泉喜一	日本語 (印欧語)
関口美緒	日本語
木村泰介	日本語
孫偉	中国語
蒋家義	中国語

## Dまえがき

本書は「日本語構造伝達文法」の研究書シリーズの第5冊目となる。(入門書シリーズは『日本語のしくみ』として、すでに(1)~(3)の3冊出版されている。)

- ①『日本語構造伝達文法』(2000年版, 2005年版, 2012年版)
- ②『日本語構造伝達文法 発展A』(2003)
- ③『日本語態構造の研究 ー日本語構造伝達文法 発展Bー』(2009)
- ④『主語と時相と活用と ー日本語構造伝達文法・発展Cー』(2014)

本書 ⑤『日本語・中国語・印欧語 ー日本語構造伝達文法・発展Dー』(2018)

本書では5人の研究者が次のような研究論文を発表している。

### [D I 論文] 格表示は名詞と動詞の間でなされる

ー言語は元来SOV型(日本語型)かー 今泉喜一

「格」とは名詞と動詞との論理関係であるから、「格表示」は名詞と動詞の間でなされる。つまり、語順がSOVのものは、SO●Vのように名詞後部の後置詞(格助詞)で格を表し、SVOのものは、SV●Oのように名詞前部の前置詞で格を表すのが原則である。

印欧語はこの原則に従っていないようなので、考察を行った。……印欧語は元来日本語と同じSOVであり、名詞後部で格表示をしていた。しかし、その名詞後部が格だけでなく性や数の要素も含むようになり、複雑化し、屈折語となった。この複雑性を解消するために語順を逆にして現在のV●Oとした。ここに生じる前置詞により「格のみ」の表示が可能となり単純化でき、名詞後部は格表示に使用する必要がなくなった。印欧語のうち、ラテン系言語や英語などは一応この目的を達したが、ロシア語などは途上にあり、いまだに前置詞格表示と、名詞後部格表示の両者を保っている。

日本語は歴史的に一貫してSOV型の言語である。世界総言語のほぼ半数(49%強)がSOV型である。35%のSVO型も、もとはSOV型であったと考えられる。この視点からも、SOV型の日本語の研究の重要性を捉える必要がある。

### [D II 論文] 事象「歩く」と「走る」の異同 関口美緒

「1歩歩いてみてください」とは言えても、「1歩走ってみてください」とは言いにくい。「歩く」と「走る」は類似の動作ではあるが、なぜこのような違いがあるのか。日本語構造伝達文法の事象の捉え方で分析した結果、「歩く」も「走る」も構成要素の1組は2歩であるが、「歩く」では、構成要素の1組(2歩)の全体を捉えなくとも、半分(1歩)を「取り出して」表現できるのに対して、「走る」ではそれができず、少なくとも1組以上は必要である、ということが判明した。また、両者の事象構成は、抽象化すれば同じであるが、具体的に表現すれば、「滞空期」要素の有無が明確になることが示せた。さらに、事象5に「休止」の要素のある場合のあることも明示できた。

[DⅢ論文] 「無洗米」の構造と時相 木村泰介

「無洗米」という語は、「洗ってない米」の意味であるはずなのに、「洗う必要のない米」という意味になっている。ここに違和感がある。この違和感がなぜ生じるのかを、日本語構造伝達文法の「構造」と「時相」の考え方で考察してみた。すると、構造的には問題がないが、時相の面で問題があることが判明した。

「無洗米」の「洗」をウゴキ名詞、「米」をモノ・コト名詞として、名詞両者の一般的な使用法を調べてみた。すると、やはり「無洗米」は特殊であることが判明した。そして、違和感を生じさせないためには「無洗炊き(米)」とするのがよいと分かった。

[DⅣ論文] 中国語の語法アスペクトの種類と構造 孫偉

アスペクトとは、動作の開始、進行中など、事象のどの局面を捉えるかの概念である。中国語でのアスペクトに関連する研究は、1924年に始まって、特に80年代以降に盛んに行われるようになった。しかし、概念や研究法などはさまざまであった。

本稿では、まず、中国語でのこれまでの研究を、問題点と評価点を明らかにしつつ整理した。次に、中国語での語法アスペクトをどのように捉えればよいのかを、日本語構造伝達文法の提示する時相の考え方、図示法に基づき説明した。この新たな方法により中国語のアスペクトを深層から捉えることができるようになる。

[DⅤ論文] 中国語の句の意味構造 蔣家義

中国語にも文の構造の分析法・図示法はあったが、文の成分を示すことが中心であった。日本語構造伝達文法の考え方と図示法では、文の成分のみならず、深層格・表層格、「主題－解説」構造をも分析して図示することができる(第1章)。

本稿では、まず主述句について考察し(第2章)、次に述目句(第3章)、結果述補句(第4章)について考察している。この考察に当たっては、日本語と文法体系が異なる中国語の、特に格の扱いに工夫をしている。日本語では格を「が、を、に」などの格詞で表すが、中国語では「格フレーム」という扱いの中で格表示を「施事、受事」などという表現で行うのが適切であると考え、新しい図示においてもこれを活用している。

本稿は、日本語構造伝達文法の考え方と図示法を適用して、中国語の文の構造の理解を深めたものである。

なお、本稿はすでに1冊の著書(『中国語の句の意味構造——日本語構造伝達文法の適用』、揺籃社、2015)としたものであるが、本書に収録するにあたり、必要な改編を行った。索引は割愛した。

以上、本書は「日本語構造伝達文法」の現段階での発展状況を示したものである。

2018年7月 今泉喜一

## 目 次

Dまえがき ( i )

D I 論文 格表示は名詞と動詞の間でなされる  
一言語は元来SOV型(日本語型)かー 今泉 喜一 ( 1 )

D II 論文 事象「歩く」と「走る」の異同 関口 美緒 ( 21 )

D III 論文 「無洗米」の構造と時相 木村 泰介 ( 31 )

D IV 論文 中国語の語法アスペクトの種類と構造 孫 偉 ( 47 )

D V 論文 中国語の句の意味構造 蔣 家義 ( 71 )

Dあとがき ( 155 )

## 詳細目次

D I 論文 格表示は名詞と動詞の間でなされる 一言語は元来SOV型(日本語型)かー	今泉 喜一	1
D I 要旨 (1)		
D I.1 研究対象となる事実と問題 (1)		
D I.2 構造伝達文法における格 (2)		
D I.2.a 構造伝達文法 (2)		
D I.2.b 深層構造のモデル (2)		
D I.2.c 格の定義 (3)		
D I.2.d 「の」は格を示さない (4)		
D I.3 SOV型(日本語型)は後置詞, SVO型(英語型)は前置詞 (4)		
D I.4 格表示の位置……名詞と動詞の間 (5)		
D I.4.a 名詞と動詞と格を構造図で示す (5)		
D I.4.b 日本語は後置詞, 英語は前置詞 (6)		
D I.4.c 「格表示は名詞と動詞の間でなされる」を仮説とする (6)		
D I.5 仮説「格表示は名詞と動詞の間でなされる」は正しいか (6)		
D I.5.a ロシア語には適用できない? (6)		
D I.5.b では, 仮説「格表示は名詞と動詞の間でなされる」は間違いか? (7)		
D I.6 印欧語 (8)		
D I.7 印欧語の語順は日本語と同じOV型であった (10)		
D I.7.a ヒッタイト語……日本語と同じSOV型 (10)		
D I.7.b ラテン語……SOV型(日本語型)からSVO型(英語型)へと変化 (10)		
D I.7.c ゲルマン語(英語)……もとは日本語と同じSOVであった (12)		
D I.8 ロシア語もSOV型(日本語型)からSVO型へ (13)		
D I.8.a ロシア語の特徴がつかめるのは14世紀後半以降 (13)		
D I.8.b ロシア語は格組織温存……二重の格表示に (14)		
D I.9 なぜSOV型(日本語型)がSVO型(英語型)に移行する必要があったのか (15)		
D I.9.a 格表示の複雑さ解消のためにSVO型(英語型)に移行 (15)		
D I.9.b 日本語の膠着性は構造を把握しやすい…日本語構造伝達文法 (16)		
D I.10 結論 (18)		
D I.11 今後の課題 (18)		
[日本語構造伝達文法]の既刊書リスト (19)		
D I 参考文献 (20)		

D II 論文 事象「歩く」と「走る」の異同	関口 美緒	21
D II 要旨 (21)		
D II.1 事象を構成要素で捉えて分類する (21)		
D II.2 事象5は2種類に分類できる (23)		
D II.3 「歩く」と「走る」の構成要素 (24)		
D II.3.a 「歩く」と「走る」を対比させる (24)		
D II.3.b 構成要素の図示法2種類 (25)		
D II.3.c 目的による構成要素分析の違い (26)		
D II.4 「歩く」と「走る」の異同 (27)		
D II.5 まとめ (29)		
D II 参考文献 (30)		
研究者紹介 関口美緒 Mio Sekiguchi (30)		
D III 論文 「無洗米」の構造と時相	木村 泰介	31
D III 要旨 (31)		
D III.0 問題点 (31)		
D III.1 「無洗米」を構造の面から考える (31)		
D III.1.無 漢語の「無」 (31)		
D III.1.名詞「無」 名詞の「無」 (32)		
D III.1.接頭「無」.a 接頭辞の「無」 (32)		
D III.1.接頭「無」.b 「無N」に一般化 (33)		
D III.1.接頭「無」.c 「無N」は名詞として使用される (33)		
D III.1.接頭「無」.d 「無N」名詞の構造上の位置 (34)		
① 「無N」名詞が, ある動詞と格関係にあることをそのまま格で表現 (34)		
② 「無N」名詞が, 関係の名詞を「の」で修飾 (35)		
③ 「無N」名詞が, 関係の名詞を「+」で修飾 (35)		
D III.1.接頭「無」.e 「無」は日本語構造伝達文法では「詞」 (35)		
D III.1.接頭「無」.f 「無洗米」の構造 (36)		
D III.2 「無洗米」を時相の面から考える (36)		
D III.2.1 ウゴキ名詞, モノ・コト名詞 (36)		
D III.2.2 「無N <sub>1</sub> 」N <sub>2</sub> のあり方 (39)		
D III.2.3 「無N <sub>1</sub> 」N <sub>2</sub> のあり方……結論 (42)		
D III.3 「無洗米」という語の理解 (42)		
D III.4 今後の課題として……意味否定と構造否定……日本語と原語の構造 (44)		
D III 参考文献 (45)		
研究者紹介 木村泰介 Taisuke Kimura (46)		

DIV論文 中国語の語法アスペクトの種類と構造 要旨 (47)	孫偉 …………… 47
1 先行研究の分類と構造分析 (47)	
1.1 早期研究 (47)	
1.2 発展期研究 (48)	
2 中国語のテンス・アスペクトの時間的構造関係 (54)	
3 中国語の基本的語法アスペクト (55)	
3.1 未来の構造と表現 (55)	
未来開始(前) ([ 01 ]) (55)	
未来進行 ([ 02 ][ 12 ][ 22' ]) (56)	
未来(進行)完成 ([ 03 ][ 13 ][ 23 ]) (57)	
未来結果状態持続 ([ 04 ][ 14 ][ 24 ][ 34 ][ 44' ]) (58)	
未来結果状態完成 ([ 05 ][ 15 ][ 25 ][ 35 ][ 45 ]) (58)	
未来結果記憶持続 ([ 06 ][ 16 ][ 26 ][ 36 ][ 46 ][ 56 ][ 66' ]) (58)	
3.2 現在の構造と表現 (59)	
現在開始(前) ([ 11 ]) (59)	
現在進行 ([ 22 ]) (59)	
現在(進行)完成 ([ 33 ]) (59)	
現在結果状態持続 ([ 44 ]) (60)	
現在結果状態完成 ([ 55 ]) (60)	
現在結果記憶持続 ([ 66 ]) (60)	
3.3 過去の構造と表現 (61)	
過去開始(前) ([ 2 補 1 ]など) (61)	
過去進行 ([ 22' ][ 32 ][ 42 ][ 52 ][ 62 ]) (61)	
過去(進行)完成 ([ 43 ][ 53 ][ 63 ]) (62)	
過去結果状態持続 ([ 44' ][ 54 ][ 64 ]) (62)	
過去結果状態完成 ([ 65 ]) (62)	
過去結果記憶持続 ([ 66' ]) (62)	
3.4 開始(後) ([77]) (63)	
4 中国語の派生的語法アスペクト (63)	
4.1 反復 (63)	
4.2 単純状態 (65)	
4.3 経験 (66)	
4.4 パーフェクト (67)	
5 まとめ (68)	
参考文献 (69)	
研究者紹介 孫偉 Sun Wei (70)	



DV論文	中国語の句の意味構造	蔣家義	71
	目次 (72)		
	第1章 予備的考察 (73)		
	1 文の4つのレベル (73)		
	1.1 第1レベル (深層格) (73)		
	1.2 第2レベル (表層格) (74)		
	1.3 第3レベル (文の成分) (75)		
	1.4 第4レベル (「主題—解説」構造) (75)		
	1.5 中国語の表層格 (76)		
	2 中国語の文の図示法 (77)		
	2.1 符号図示法 (77)		
	2.2 枠式図示法 (78)		
	2.3 黎錦熙の図示法 (79)		
	3 日本語構造伝達文法と新しい図示法 (81)		
	3.1 日本語構造伝達文法の内容と特徴 (81)		
	3.2 日本語構造伝達文法の基礎 (83)		
	3.2.1 構造モデル (83)		
	3.2.2 時空モデル (85)		
	3.3 日本語構造伝達文法に基づく新しい図示法 (86)		
	3.3.1 構造モデルの位置づけ (86)		
	3.3.2 構造モデルに基づく新しい図示法 (87)		
	4 本論文のねらいと考察対象 (87)		
	第2章 主述句 (89)		
	1 主述句の種類 (89)		
	1.1 体言性主述句 (89)		
	1.2 形容詞性主述句 (90)		
	1.3 動詞性主述句 (91)		
	2 深層格の分類 (91)		
	3 体言性主述句 (94)		
	3.1 体言性主述句の深層格 (94)		
	3.2 体言性主述句の意味構造と図示 (97)		
	4 形容詞性主述句 (98)		
	4.1 形容詞性主述句の深層格 (98)		
	4.2 形容詞性主述句の意味構造と図示 (99)		
	4.3 形容詞性主述句と連用修飾語 (99)		

- 5 一項動詞性主述句 (100)
  - 5.1 一項動詞性主述句の深層格 (100)
  - 5.2 一項動詞性主述句の意味構造と図示 (102)
  - 5.3 一項動詞性主述句と付加成分 (103)
  - 5.4 一項動詞性主述句と連用修飾語 (104)

6 まとめ (105)

第3章 述目句 (107)

- 1 述目句とは (107)
- 2 述語と目的語との意味関係 (108)
- 3 格フレーム (109)
  - 3.1 必須の実体と必須格 (109)
  - 3.2 格フレームと格フレームのタイプ (110)
    - 一、一項動詞の格フレーム (111)
    - 二、二項動詞の格フレーム (111)
    - 三、三項動詞の格フレーム (116)
- 4 二項動詞性主述句の意味構造 (118)
  - 4.1 < 3 > 施事+V+受事 (V=二項他動詞) (119)
  - 4.2 < 4 > 施事+V+結果 (V=二項他動詞) (120)
  - 4.3 < 21 > 施事+V+工具 (V=二項自動詞) (121)
  - 4.4 < 23 > 施事+V+方式 (V=二項自動詞) (122)
  - 4.5 < 30 > 当事+V+客事 (V=二項外動詞) (123)
  - 4.6 < 37 > 処所+V+当事 (V=二項内動詞) (124)

5 まとめ—述目句の意味構造 (125)

第4章 結果述補句 (129)

- 1 述補句の種類 (129)
- 2 結果述補句を含む動詞性主述句の分類 (130)
- 3 結果述補句を含む動詞性主述句の意味構造 (132)
  - 3.1 (8a) の意味構造 (132)
  - 3.2 (8b) の意味構造 (134)
  - 3.3 (8c) の意味構造 (136)
  - 3.4 (8d) の意味構造 (141)
  - 3.5 (8e) の意味構造 (145)

4 まとめ—結果述補句の意味構造 (147)

おわりに (152)

参考文献 (153)

研究者紹介 蔣家義 Jiang Jiayi (154)

Dあとがき (155)